

<七条大橋>

◇諸元等

所在地：京都府京都市東山区堀詰町

道路名：一般府道梅津東山七条線

河川名：1級河川 鴨川

建設年：1913年（大正2年）

形式：鉄筋コンクリートアーチ橋

橋長：82m

支間長：15.2m（アーチライズ1.5m）×5連

幅員：18.1m

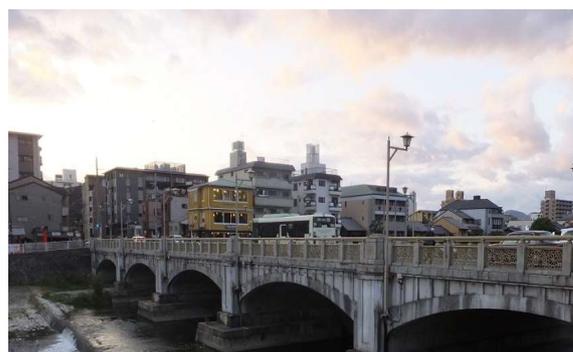


写真1 下流側より橋を望む

◇歴史

1869年（明治2年）に首都が京都から東京に移ったことにより、京都の産業や都市活力は急激に衰退し人口も減少した。第2代京都市長・西郷菊次郎（西郷隆盛の長男）は、京都の復興と産業振興の起爆剤として「京都三大事業」を計画した。市電の開通と幹線道路の拡幅はその一つで、七条大橋は四条大橋とともに架け替えが計画され、1911年（明治44年）11月に着工、1913年（大正2年）に完成した。設計は柴田畦作、意匠設計は森山松之助、山口孝吉である。



写真2 親柱（左：橋名、右：竣工年月）

1935年（昭和10年）6月28日深夜から29日にかけての「鴨川水害」では、上流の

団栗橋・松原橋・五条大橋は流されたが、上流の正面橋が橋の残骸を受け止めて七条大橋は無傷だった。水害後の河川改修計画には琵琶湖疏水と京阪電鉄の地下化が含まれた。第二次大戦後に持ち越された計画の実現により、七条大橋は疏水を跨ぐ鴨川左岸の一径間が短くなり、当初の橋長112mの6連アーチ橋は、現在、5連82mになっている。

なお、1978年（昭和53年）9月限りで、橋上を通過していた市電七条線が廃止された

◇本橋の設計の特徴

七条大橋は日本初の鉄筋コンクリートアーチ橋で、橋長が112mもある巨大な6連の橋だった。建築様式としてはウイーン分離派（セセッション）の影響をうけており、近代建築らしい堂々たる佇まいの中にも平面と直線を多用するセセッションならではの特徴が見て取れる。19世紀末から20世紀初頭のヨーロッパの新たな近代美をもたらした芸術運動の余熱が込められている。

第二次世界大戦中の金属の供出で高欄や街灯が失われた。そのため長らく木製の欄干だったが、京阪本線の地下化と川端通の開通に併せて金属製の欄干に変えられた。1987年（昭和62年）に改修された高欄には三十三間堂の通し矢がデザインされている。

毎年1月中旬に三十三間堂で新成人が晴れ着で弓を射る行事(大的(おおまと)大会)が開かれる。新成人(20歳)にちなんで、10本の矢(2面で20本)が円の中心の的に向かっている様子を高欄のデザインコンセプトにしている。

◇本橋の文化的価値

本橋は、現在鴨川に架かる橋では最古の橋であり、黎明期のRCアーチとしては群を抜いて巨大で、鴨川筋で唯一明治期の意匠を残している。2008年(平成20年)には土木学会より「選奨土木遺産」に認定され、2019年(平成31年)には国登録有形文化財に認定された。



写真3 橋のデザイン(高欄、アーチ側面)



写真4 土木遺産と文化財の銘板

◇周辺環境

橋の付近の鴨川は下京区と東山区の境界になっている。橋上からは東山の山々を望むことができるほか、南側に東海道本線・東海道新幹線の鉄橋が見える。橋の周辺は、三十三間堂、方広寺、豊国神社などの名刹や京都国立博物館がある。



◇参考文献

- ・ 京都市建設局：京(みやこ)の橋しるべ、第7号、2015年3月
(<https://www.city.kyoto.lg.jp/kensetu/cmsfiles/contents/0000149/149842/hashishirube07.pdf>)
- ・ 京阪電鉄株：京阪沿線の名橋を渡る、シリーズ9、七条大橋、
(<http://www.okeihan.net/navi/bridge/bridge09.php>)
- ・ ウィキペディア(Wikipedia)：七条大橋
(<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B8%83%E6%9D%A1%E5%A4%A7%E6%A9%8B>)